

「琵琶湖のアザシ」

脚本・大中望実

登場人物

加藤美咲 (27)

立花みずえ(35) 琵琶湖博物館の研究員兼獣医

瞳(30) 美咲の姉

栄子(56) 美咲の母

医師(40代後半)

警備員

SE 病室の椅子に腰掛ける音

医師「おめでとうございます、加藤さん、1ヶ月過ぎたところですね」

美咲「えっ、妊娠ですか？」

医師「ええ、妊娠してます。ご主人も喜びますよ」

美咲「に、妊娠…」

医「どうしました？何か問題でも？」

美咲「い、いえ…」

医師「安定期に入るまでは、決して無理をしないでください。胎児に影響がありませんから」

すから」

美咲「は、はい」

人々のざわめき。

美咲(MO)「赤ちゃんが出来てた。シンジさんが亡くなってもう1ヶ月。どうして今

頃なの…」

SE 再び雑踏の音。

SE 玄関の扉の開閉音

美咲「ただいま、あっお姉ちゃん、いたの？」

瞳「うん、美咲がちょっと心配で」

栄子「遅かったじゃない。どうだった？」

美咲「ただの過労だって…お母さん、心配かけてごめんね」

栄子「なに言ってるの、まあ、シンジさんが亡くなってまだ一月だもんね、まだまだ

疲れは取れないか…」

瞳「そうね。突然の出来事だったら…。そんなにすぐには…」

美咲「うん…」

栄子「お腹すいたでしょ…。あなたの好きな酢豚にしたわ。いい匂いでしょ？」

美咲「あ、ありがとう、お母さん、うっ（駆け出しトイレへ）」

栄子「美咲!!」

SE トイレの流す音

SE 扉の開閉音

美咲「あっ、お姉ちゃん」

瞳「美咲、あんた、もしかして」

美咲「そうよ、赤ちゃんできた…」

瞳「美咲…」

SE 新型コロナの注意喚起の場内アナウンス

アナウンス「本日は琵琶湖博物館にご来場いただき誠にありがとうございます…」

美咲「ごめんね、付き合わせて」

瞳「いいのよ。バレンタインも終わったとこだし、一段落行くところもないしたまにはね

水族館なんて懐かしいな」

美咲「バレンタインか、なつかしいな」

瞳「高校生の頃だけ？ シンジくん初めてチョコあげたの」

美咲「高校2年」

瞳「一方的に一目惚れだね、あーあ私も作るほうじゃなくて、もらう方だけにしたかったな」

美咲「初めは相手にもされなかったけど…。だんだん向こうも本気になってきて、それで付き合い始めたの」

美咲「ふーん」

美咲「初めてのデートもここだったんだ…。アザラシを見に行ったの。最後にきたのは、5年前くらいかな、ちょうど、この水族館がリニューアルした時だったっけ」

瞳「そんな思い出の場所に来てよかったの？ またシンジ君のこと思い出したんじゃないの」

美咲「わかんない…。なんとなくきたくなった…」

瞳「美咲…」

美咲「アザラシはどこにいるんだっけ」

瞳「もらった館内図にないの？」

美咲「ああ、あったこっちだ、行こう！」

瞳「美咲、あんた普通の状態じゃないんだから、そんなに走っちゃダメでしょ」

SE 二人分の足音

美咲「ここだ。水族展示室の古代湖のそこ」

瞳「博物館でアザラシしているとこって珍しいよね、水族館ならわかるけど」

美咲「一頭しかない？」

瞳「一頭だけだねえ」

美咲「前は2頭居たと思うんだけど」

美咲「うっ」（つわりがきてしゃがみこむ）

瞳「美咲、大丈夫」

美咲「（つわりで苦しむ）」

瞳「しっかりして、誰か」

SE 走り寄ってくる音

みずえ「どうかしましたか？ あっ、大丈夫ですか？」

美咲「い、痛い…」

瞳とみずえが雑談している声

美咲「ここはどこ？」

みずえ「気づきました？」

瞳「大丈夫美咲？」

美咲「私どうしちゃったの？」

瞳「アザラシの水槽の前で気持ち悪くなって倒れたの、そこにこの飼育員さんがたまた

ま通りかかって助けてくれたんだよ」

美咲「ありがとうございます」

みずえ「落ち着きましたね、多分大丈夫だと思いますよ、お腹のお母さんも影響はない

と思います」

美咲「えっ」

みずえ「獣医でもあるので…。動物と人間の違いはありますが（笑いながら）」

美咲「やつぱり、いるんですね、赤ちゃん、お腹に…」

みずえ「えっ、なんかまずかったですか…。ごめんなさい」

美咲「（突然、泣き出す）」

みずえ「えっ、えっ、ど、どうしよう?..」

瞳「よく寝ていますね」

みずえ「妹さん、かなりお疲れのようですね…。まさかそういう事情があったとは」

瞳「美咲の夫のシンジ君は、ωヶ月前交通事故で突然なくなって、そのショックを引き

ずったままの状態で赤ちゃんが見つかったんで、妹はかなり動揺していると思います」

みずえ「そうだったんですね、それとは気づかずに失礼なことを言ってしまいました。

申し訳ありません」

瞳「いいえ、あなたのおかげで大事にならずに済みました。ありがとうございました」

みずえ「でも、話を聞いてると同じような状況なんですね。ここのバイカルアラシは、

元々はつがいだったんですよ。その一頭のメスの方は妊娠していた時に、そのまま病

気になって亡くなってしまったんです。彼一人になっちゃいましたけど。今は元気に

しています」

瞳「そんなことがあったんですか…」

医師 「加藤さん、加藤美咲さん、診察室へお入りください」

SE 扉の開閉音

産婦人科・診療室

医師「7週目ですね、順調ですね、加藤さん」

美咲「は、はい…あの先生、中絶するにはどのくらいまで大丈夫ですか？」

医師「法律的に中絶可能なのは22週未満ですが、母体に負担がかからないのは、6週

目までです」

美咲「9週目。あと2週間…」

SE バイカルアザラシの声

みずえ「あ、あれ？」

美咲「こんにちは、この間ありがとうございました。あ、あの…」

みずえ「立花、立花みずえです」

美咲「立花さん、加藤美咲です」

みずえ「みずえいいですよ、美咲さん」

美咲「じゃあ、みずえさん」

みずえ「バイくん、気に入って頂けました？」

美咲「バイくんと言うんですか？」

みずえ「オスで今年で18歳になります、バイカルアザラシではまだまだ若いんですよ」

美咲「バイカルアザラシ？」

みずえ「ロシアのバイカル湖に生息している固有のアザラシで淡水で生活しています。

見た目の特徴としては、大きい目と口ひげが多いことです。模様はありません。潜水

時間が長く泳ぐのが大好きなんです。性格は日本近海にいるアザラシより穏やか、臆

病で警戒心の強いです。」

美咲「へえ」

みずえ「バイくんは、特にナイーブでデリケートなタイプの子です。なんで、なかなか

人に懐かなくて困ってました」

美咲「何で水族館ではなくて、博物館にアザラシがいるんですか？」

みずえ「バイカル湖って琵琶湖と同じ古代湖なんです。その古代湖について知ってもら

うための展示の一つとして福岡の水族館から来てもらいました」

美咲「奥さんのマリちゃんは？」

みずえ「3年前になくなって…マリちゃんの妊娠が発覚した後、病気で」

美咲「そ、そんな」

みずえ「バイくんの方が神経質なため、環境の変化に耐えられるかなと思ったんですが、逆に気が強い変化に強かったマリちゃんの方が病気になっちゃって」

美咲「バイくん、それ以来、ずっと一人なんですか？」

みずえ「ええ、昨今の文化施設への予算削減の影響を受けて、新しいバイカルアザラシを購入できずにいるんです」

SE 玄関の扉の開閉音

美咲「ただいま」

栄子（シシの母と電話中）

栄子の声「まあ、産む産まないは本人の意志に任せたいと思います。ご心配いただきありがとうございます（電話をきる）」

栄子「あら、美咲、おかえり」

美咲「お母さん、今の電話の相手って？」

栄子「シンジさんのお母さま、あなたの体のことを心配して電話をかけてくれたの。あなたの将来のこともあるから、無理して産まなくていいわよって言ってたわ。私もその方がいいと思う。あなたはまだ若いんだし、シンジさんの事故のことは悲しいけれ

ど、それをずっと引っ張って生きていくのは、ちょっと重すぎる。それにシングルマザーになって、子供を育てるのも今の社会の状況では大変だと思うし。そろそろ考えた方がいいんじゃないの？」

美咲「分かってる、分かってるわ、私も必死に考えているのよ（飛び出す）」

SE 水のはねる音

みずえ「バイくん、今日もよく食べたね、さてと私も帰って夕飯の準備しなくちゃ」

美咲の声「離してよ離して！別に悪い事しに入ってきたんじゃないんだから」

警備員「そんなこと言ったって、とっくに閉園時間を過ぎてますよ！」

みずえ「どうしたんですか？あつ美咲さん？！」

警備員「この人が閉園時間を過ぎているのに、勝手に入ってきたんです。それを見つけて捕まえようとしたんですが、逃げられちゃって」

みずえ「大丈夫です、この人は私の知り合いですから」

警備員「ですが…」

みずえ「本当に大丈夫ですから、私が責任を持ちますので…」

警備員「まあ、立花さんがそうおっしゃるなら…」

突然、咳き込む美咲

みずえ「美咲さん。大丈夫、大丈夫ですか！」

SE ロップを置く音

みずえ「はい、温かいハーブティー。落ち着きますよ」

美咲「ありがとうございます。すいません、みずえさんにまでこんなに迷惑をかけてしまっ…」

みずえ「一体何があったんですか？」

美咲「実は、私、妊娠してるんです。ご存知のように夫は交通事故で亡くなりました。それで赤ちゃん、産むかどうか迷ってるんですけど、なかなか決心がつかなくて…。姑や母は、再婚できるように子供おろして、第二の人生を歩むようにアドバイスされんですが、どうしても踏ん切りがつかなくて、知らず知らずのうちにここに来て、バイくんに会いたくなっちゃったんです」

みずえ「そうだったんですか…」

SE バイカルアザラシの鳴き声

みずえ「前にも言ったと思うんですけど、アザラシってすごく警戒心が強い動物なんですよ、このバイくんもなかなか人になつかなくて、奥さんのマリちゃんのほうが早く慣れてくれたんです。バイくんも奥さんに釣られて、段々と懐いてきたんですけどね……」

みずえ「マリちゃんが亡くなってからは悲しそうな顔をしていることが多かったです。餌は普通に食べて居たんですけど……」

美咲「そんなことが……」

みずえ「だから私たちはバイが楽しくなるようにトレーニングやコミュニケーションの取り方を考えて一緒に立ち直って、今じゃマリに自慢できるくらいいろんなことが一緒にできるようになりました」

みずえ「嬉しかった、生きようと気持ちになってくれたって……」

美咲「バイくん……」

バイくんが美咲の方へ寄ってくる。

みずえ「え、えっ、う、うそ!」

美咲「えっ?」

みずえ「バイくんが、美咲さんの方へじぶんから近づいてきた!」

美咲「えっえっ?？」

みずえ「バイくんってすごい人見知りがあるのに、ちょっと会ったくらいじゃ、絶対に近づかないのに、美咲さんに寄ってくる…」

美咲「それはみずえさんがいるからじゃないんですか？」

みずえ「二人の時なんて、もっと寄ってこないんです。警戒しちゃって、なのに寄ってくる…。バイくん。応援してるんでしょ、美咲さんのこと」

SE バイカルアザラシの鳴き声

医師「加藤美咲さん、診察室へお入りください」

SE 扉の開閉音

医師「順調ですね、そろそろ、6週目ですけど、どうします？産みますか？堕しますか？

美咲「先生、私は…」